

第1部

みんな、心に、 アントレプレナーシップ

ある日出会うことがあります。自分が変わる瞬間に。通りすぎてしまうかもしれません。でも何回もきます。毎日、何回も何回も訪れてくれます。準備なんかありません。その瞬間に変わってしまえばよいのです。

レギュラーになれなかったとか、受験に失敗したとか、ゼミに入れなかったとか、就職が思うようにいかなかったとか、いつもふられるとか、だいたい人生はよいことはありません。社会に出ても伝票の種類を覚えられない、朝起きられない。休日はぐうたら。ほとんどの人はそんなものです。そうになってしまうとうまくいかないことをほかの人や社会のせいにしてしまいがちです。

誰にでもほかの人のことが心から消えるときがきます。そこが始まりです。誰でも、いつでも始められます。

第一部、自分のやりたいことをやって、しかもうまくいく方法がある。それがアントレプレナーシップ。これを知らずにいられるか！

さあ、ページをめくってみよう。

1・1 アントレプレナーシップへの一歩

○関わっていたい

ワクワクに関わっていたい

乗り遅れたら困る

学生や若手の社会人と付き合っていて感じることに「何か面白そうなことや、かつこよさそうなおことに関わっていたい」と思っている子が多いことがあります。新しいものを考え出したり、みんなで真剣に議論したりすることって、何かワクワクしますよね。自分が考えたことが社会を変えるかもしれないし、大成功して有名になるかもしれません。

しかし、自分が面白いことを作り出すというより、少し関わっていらればよいと思う子が多いのです。この傾向は男女問わずで、男子の方により顕著です。女子の方がまだ自立心が強い。

「関わっていたい」子には周りより「抜き出したい」というより「乗り遅れたくない」という思いが強くあります。むしろ「乗り遅れたら困る」という強迫を感じているようでもあります。

多少生意気で謙虚さがなくてもよいから、自分が先頭に立って進みたいという子の方が魅力的で

す。しかし、なかなか出会えませんが。そういう子は30人に1人くらいです。アントレプレナーシップに引き寄せられてくる連中なので、もともとそういう子がいる確率は比較的高いはずなのに、そのくらの確率です。一般の若者の中ではさらに確率が低そうです。

ニート・オタク戦略

ここに本質があります。「関わってほしい」が今風なのです。確かに「自分がやってやる」という気概がある連中は頼もしい。しかし、そういう連中はうまくいかないことも多い。挑戦したら失敗もあるからです。若年人口がどんどん増える時代なら、どんどん挑戦してうまくいった者だけが残ればよいでしょう。今はそういう時代ではありません。

乱暴なたとえば、若者がどんどん増えていた、私よりも先輩の人たちの時代には、学生運動がありました。あんなに危険なことはないでしょう。一方で、社会には進化するダイナミズムがありました。私が大学生だった頃は、演劇ブーム、バンドブームの時代でした（第三舞台や夢の遊眠社、ビギンやジッターリンジンなどが出てきていました）。演劇もバンドも生きていくためにはほとんど役に立たないことです。しかし、何かやりたくてしかたがないエネルギーはそこに向かっていきます。今は、ニートの時代でしょう。オタクの時代とも言えます（オタクの定義は様々なので一概に言えませんが）。ニートやオタクは少子高齢の社会の中で若者が自分を守るために生み出した戦略なのです。たとえ話終わり。

少子高齢化となっている現在、気概よりも、安全を選ぶ若者たちの戦略はしごくまっとうです。少

子高齢の社会環境では、そうなるのが必然ではないでしょうか。無能なふりをして前戦には立たず、後ろからついていって様子をうかがう戦法です。その間に能力を高め、知識と技術を身につけるのです。関わっていたい若者が増えたのは、環境への適合なのではないでしょうか。

関わっていたいのは危険でもある

よく食べる幼虫と食べない幼虫

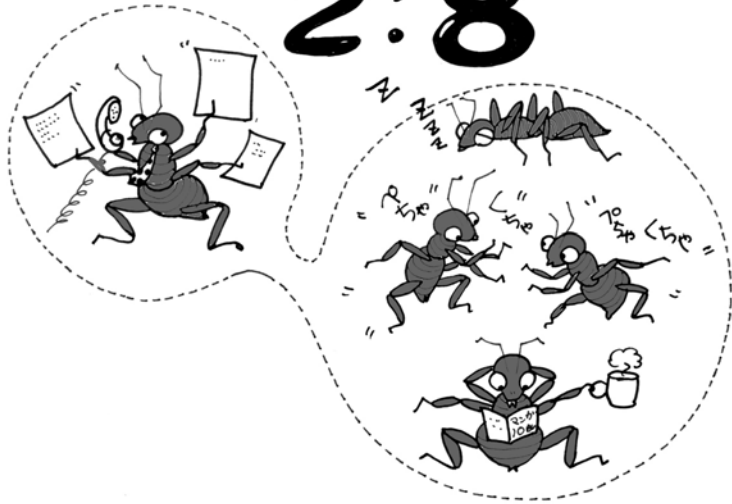
少子高齢の社会環境では、関わっていたいでも悪くない。そうだとしても、関わっていたいにはよくない面もあります。

講座にくる若者はよく「優秀な人と一緒にいて成長したい」と言います。それは可能なことなのでしょう。よく食べて大きく成長する幼虫と一緒にいたら自分も大きくなれるでしょうか。自分が食べない限り自分は成長しません。優秀な人と一緒にいれば、一緒にいるときはこの人すごいなあ、と感じるし、チーム全体としての生産性も高いでしょう。しかし、自分の生産性は高まるでしょうか。一緒にいる間は優秀な人の仕事の仕方を見て、ワクワクするでしょう。でも、チームが解散した後はどうでしょう。残された自分は何か変化しているのでしょうか。

最初は「関わっていたい」でもよいでしょう。しかし、いつか「関わっていたい」から「自分で企てる」に変わらなくてはなりません。「自分で企てる」のがアントレプレナーです。

優秀な人と一緒にいることは、かえって、自分が変わらなくてはと思いきっかけを奪ってしまします。優秀な人が考えてくれて、作業をしてくれて、自分は何もしなくてもチームとしては褒められ

2:8



る。優秀な人はさらに成長して先に行き、自分だけが取り残されてしまいます。自分にとっては時間を浪費していただけとなるのです。

2割8割の法則

2割8割の法則というものがありません。アリの群れを観察すると、よく働くアリは2割で残りの8割はあまり働いていないそうです。そして、よく働くアリだけを集めると、2割だけが働き8割が働かなくなってしまうのだそうです。逆に、働かないアリを集めても2割はよく働くようになるそうです。これは優秀な人と一緒にいると働かなくてもよくなってしまふということを意味しないでしょうか。逆に、優秀ではない人と一緒にいて、自分が働かなくてはならない状況に追い込まれる方が自分の成長につながるということでは

はないでしょうか。

講座を受けにくる学生に、「優秀な人と一緒にいたいという人はなかなか成長しないよ」と話しても正しく聞いてはくれません。「優秀な人と一緒にいると成長できる」という神話はかなり強固に浸透しています。この強固な神話を打ち壊すのが講座の役割の一つとなっています。

弟子入り

一緒にいたいと、似ていて違うものに弟子入りがあります。弟子になるということは一緒にいたいというような生やさしいものではありません。そもそも師匠は弟子など取ってくれません。弟子は勝手に押し掛けてなるものです。温かく迎え入れてくれるような師匠は弟子入りするほどの価値がある師匠ではありません。師匠は理不尽です。

弟子入りは職人の世界に入っていくことです。職人の世界で師匠や先輩が技を教えてくれることはありません。学校とは違います。盗まなくてはなりません。「盗む」が「企てる」に当たります。自分が強い意志を持って観察し続けなくては身につきません。関わっていたいとは対極にある世界です。修行期間がまさに「関わっていたい」が「自分が企てる」に変わる過程です。弟子入りならやってみるとよい。